

2022年 8月14日



「デジタルタトゥー」とは、インターネット上に書き込まれた情報が一度拡散されると、その後もずっと残り続けること。肌にも入れられたら、容易に消せなくなる入れ墨(タトゥー)になぞらえた造語で、削除は

# ハッシュタグ #現代

17

一部からは、外国の問題や女性解放運動にまで手を出す必...  
こうした状況は、警察当局の警戒を招いた。講演会当日の朝、小牧が所轄の神田錦町署に開催届けを提出すると、署から突然、開催の条件として「無料入場」とするよう通告されたのである。

## 再起編 20

# 官憲



有島武郎(国会図書館「近代日本人の肖像」より、1922年7月撮影)

に見舞われる。講演者は山川ら7人を予定していたが、1人目の金子ひろ子が「隣国ロシアの労働婦人は幸せ」と語り出すと、2階席の何者かが反革命の宣伝ビラを聴衆の頭上にまいたのである。国家主義団体「赤化防止団」の仕業であった。(文学博士、あきた文学資料館名誉館長)



「情報をどう運用するかは、その時代を生き制するしか重要な制御方法の一つ」と話す河瀬季さん

「違法な投稿なら法的な手段を使って97%は削除できます。でも海外サーバーを利用する匿名管理者の運営サイトなど、削除が難しいケースもわずかにあります」

## デジタルタトゥー

# 消えない過去の苦しみ

人間はなぜ、忘れられない過去に苦しめられるのか。脳と意識の問題を深く考察した著書「唯脳論」(ちくま学芸文庫)がある解剖学者の養老孟司さんは「生き物の中で自分や他人の記憶にこれほど苦しむのは、

ド記憶を持っています。他人のうわさ話もこれに属する。昔は「人のうわさも七十五日」だったが、今はデジタル情報が人々の記憶を補充してしまふ。「ただその状態は、嘆いても解消されない。社会問題として議論すると同時に、個人、個人では『いかに受け入れるか』を考る段階なのかもしれない」

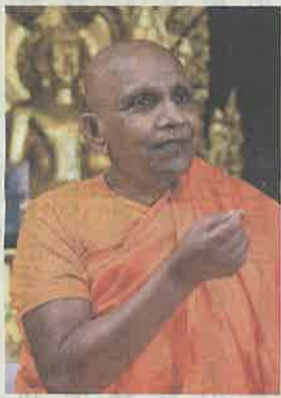
悪意をSNS(交流サイト)に投稿する『バイトテロ』、盗撮や『リベンジポルノ』などの性的画像に関する相談が増えている。エンジニアから弁護士に

約15年前に電車で女性の下半身を触り、強制わいせつ容疑で逮捕された関東地方の男性の場合も、いまだに書き込みが消えない。大手企業を解雇された彼は逮捕時「幼い息子がいつかネットでの自分の過去を知ることが最も怖い」と語っていた。



「現代人は人の目を気にし過ぎている。心の中に『駄目』を極力減らしてみたい」と話す養老孟司さん

「ヒトは、ある出来事を物語として覚えるエピソード。記憶は怒り、憎しみ、喜びなどの感情のラベルとなつて、心の中に貼り付



「記憶していることなんて、長い人生に取らないほんの小さな出来事なんです」と話すアルボムッレ・スマナサーラさん

「記憶していることなんて、長い人生に取らないほんの小さな出来事なんです」と話すアルボムッレ・スマナサーラさん。その自身が「新たな不幸」を再生産する行為ともいえる。

## 線を引く時期はいつ

犯罪情報は、いつまでインターネット上に残るべきか。弁護士の河瀬季さんは「ケース・バイ・ケースで扱いが異なるので一概に言えないが、最終的には人間がどこかで時期に線を引くしかない」と話す。河瀬さんが2017年に刊行した小説「デジタル・タトゥー」(自由国民社)には、自分が逮捕された過去の痴漢事件の記事がネット上に残っているのが原因で、再就職できない

元教師のエピソードが登場する。事件がニュースになった時点では情報には公共性がある。それが負の意味合いに転じるタイミングはいつなのか。いつまでも情報がネット上にどどまると、逆に公共の利益に反することになりかねない。河瀬さんは「どの段階で削除すべきかは、その時代を生きる人間の価値観で判断せざるを得ない」と話す。

## かわうそときつね

むかし、むかし。川に一匹のかわうそが住んでいた。かわうそは近くの山に住んでいるきつねと遊んでいた。ところが、きつねはさるくへ、いつしかかわうそを連れて、



「この川には魚がいっぱいいるから、橋から魚を」